

農民と「近代」

——戦前期農村社会における農民意識の重層——

野 崎 賢 也

はじめに

もし、日本の農村のこの百年間を通時的に眺めてみる事ができるなら、戦後の高度成長期を通過するまで、その外見に関しては顕著な変化を認めることができないのではないだろうか。言い換えれば「近代（モダン）」を感じさせる事物、それが溢れんばかりに農村に浸透していき外部の者の目に頻繁に触れるようになったのは、それほど昔のことではないはずである。明治から昭和初期までの「近代」日本の農村の外観は、その風景から人々の暮らしぶりに至るまで、前近代からの「連続」が大きな部分を占めていたと言えるだろう。

同様に、「農民」という存在が喚起するイメージも前近代から近代、そして現代まで固定化されて来たのではないか。例えば、イエとムラに強く規定された「封建的」生活と、「近代化」への様々な抵抗や葛藤を示す意識を持った「農民」のイメージがある。そうした「農民」の意識あるいは資質は、支配-被支配の文脈に寄り添うもの、その関係を強化するものとして捉えられてきた。こうした支配に従順な農民像のステレオタイプの反面には、一揆や農民運動などの表立った抵抗、あるいは日常の生活の場面において露な利己主義とともに狡猾に立ち回る「民衆」としての農民のイメージもある。

こうしたイメージの下で、現実の農民の姿、特に農民が様々な形態で「近代」を経験していく過程は、ともすれば視野の外におかれがちであった。例えば、この経験は大きく三つの次元に分けられる。(1)「近代」という一つの時代、(2)制度や理念あるいは事物としての「近代」（例えば教育や自治制度あるいは「平等」や「国民」のような観念、そして「モダニズム」）、(3)そして農民が生きた場所として彼らの生活の中にある「近代」（「生きられた近代」）である。これまでの視点では、「農民」が導くイメージとその外面の「前近代」に囚われ、それぞれの次元での農民の多様な「近代」経験そのものの内実は、なかなか問題にされてこなかったのである。

「農民」と「近代」に対するこのような認識を補強してきたのはやはり、近代日本にお

いての「農本主義」の隆盛である。「農本主義」は、この時代の農村・農民における「反近代・前近代」の象徴であったと考えられてきた。しかし、「農本主義」が必ずしも「反近代」のみに限定化できるものではないのと同様に、農民にとっての「近代」も単に「近代化」への抵抗、あるいは「反近代」というネガティブな対応に止まらない多様な意味を持っていたのではないだろうか。

本稿では、農民にとってのそうした多様な「近代」との出会いのあり方、その重なり合った意識の一端を描いていくことを目指している。しかしながら、個々の農民の固有の歴史、その個別性を細かに追っていくことはここでは不可能であり、それゆえ本稿は大まかな一般論、ラフなスケッチに止まる。今後は、一方でマクロな時代意識を追求しながら、他方でミクロな視点から個別性に重点をおいて農民の固有の「近代」経験を分析していく必要があろう。また、本稿の中では「農本主義」について少なからず言及しているが、紙数の都合もあり「農本主義」それ自体についての議論は別の機会に譲ることにして、「農本主義」が単にイデオロギーや政治運動に止まらない拡がりを持ったものであるという立場であることを願しておく⁽¹⁾。

第1章 「近代」をめぐる論点

ここでは、農民にとっての「近代」をどのように見ていくべきなのか、最近の諸研究の成果と問題点を簡単に整理しながら本稿での論点を明らかにしていきたい。

現在までの近代農民史・農民研究の方向は、およそ一定の範囲に収斂してきたと言ってよいだろう。つまり、階層（分解）論、共同体論、あるいは農民運動論など、農民の日常生活からは幾分か距離のある部分に問題が設定されてきたのであった⁽²⁾。こうした流れの近代農民研究の欠落を補うような視点から最近、幾つかの研究がなされている。例えば大門正克は、「農民史における関心はもっぱら労働と生産の領域に集中し、生活をふくめて日常性の構造を問題にする視点は希薄であった」と指摘し⁽³⁾、農民の日常生活およびその意識に焦点を当てた研究を行っている。あるいは板垣邦子による雑誌『家の光』研究では、

⁽¹⁾ 従来の文脈で用いられてきた「農本主義」という言葉が指し示す範囲は非常に狭く、そうした従来の用法とは異なる定義を用いていることを表すために、以下では農本主義という言葉は全て「」を付けて用いることにする。

⁽²⁾ 農村社会学の分野では、菅野正の一連の研究などがあげられる。（菅野 1978，菅野・田原・細谷 1984，菅野 1992）

⁽³⁾ 大門 1994 p.9

今までほとんど論じられることのなかった、しかし農家の「生活」そのものを実質的に支えていたという点で決して無視するわけにはいかないはずの当時の農村主婦層について本格的に取り上げられており、戦前期の農家の家庭生活の実態が詳細に記述されている。

このように農民の日常と生活の場面に焦点を移行させた諸研究が意図するのは、農村・農民にとっての「近代」のインパクト、影響、あるいはそれへの対応という様々な「経験」の総体を内側から明らかにしていくことである。その際には、農民の生活の中に外側から入ってくる制度や理念・事物としての「近代」、そしてそれらに接しながら個々の農民が生きた「近代」（生きられた「近代」）という二つの次元が中心的な対象となっている。「近代」に対する多様な反応を見逃すことなく、そしてその多様性をこそ追求していこうという姿勢である。これを換言すれば、近代という時代の農村・農民研究の文脈に「近代」を再導入することだと捉えてもよいのではないだろうか。「近代」を農村・農民の外部のものとして捉え、それに対する抵抗や反発など、ようするに「反近代」という農村・農民の表面に拘泥してきた従来の研究が見逃してきた部分をこれらの研究が明らかにしているのである。

本稿では、こうした最近の諸研究の成果を用いて議論を展開していく。そこでまず、その主要な研究を概観し、ここでの議論に有用な成果および各々の不足部分を記しておきたい⁽⁴⁾。

大門正克は『近代日本と農村社会』において、農民の日常生活やその生活意識を中心に、第一地大戦後から昭和初期にかけての農村・農民の変化を著している。この第一地大戦後から昭和初期に至る時期は、「民衆生活上の近代化が本格化」した時期であった。そこで注目されているのは、この時期に表出した民衆の「社会的上昇欲求」であり、民衆が国家・社会の中で自己の位置・地位を認識し始めていく過程である。大門はこの視角を、「民衆の自己認識史」と呼ぶ。「民衆生活上の近代化」の具体的な例としては、当時の農民の日常の暮らし、特に生活用品・嗜好品、食料などが消費経済に巻き込まれていく様子や、行政や組合など農村内の様々な組織の内部の変化などが中心に描かれている。そして、こうした「生活の近代化」とともに農民の意識に浸透していった「近代」（制度や理念・物としての「近代」）を浮かび上がらせている。特に、下層農民が「国家・社会」に対して「人格承認」を求めるようになったという大門の指摘は、この時期の農民の社会意識を考える際に非常に重要なものであり、本稿でもこの点に注目して議論を展開することになる。

⁽⁴⁾ 本分で取り上げた研究の他に、東敏雄はこの時期の農家経営と、国家主義運動の関わりを経済史の分野から、特にその「勤労」的経営観に着目して分析している(東 1987)。あるいは、安田常雄による民衆運動研究、(安田 1979, 1987) がある。

次に、板垣邦子による『昭和戦前戦中期の農村生活』では、雑誌『家の光』の分析を通して昭和初期の農村大衆の意識が明らかにされている。従来の研究では、『家の光』の内容をはじめとして当時の農村大衆の意識に関して、「反近代・反都市」の側面ばかりが強調されていた。例えば、社会学の分野における高橋徹の「反都会主義」分析などはその典型であろう⁹⁾。けれども板垣は『家の光』分析から当時の農村大衆が「近代」を決して否定していなかったこと、それどころか逆に「近代」に憧れそれを切実に追求しようとしていたことを主張する。『家の光』に触発される形で農家の生活を「近代化」しようとする様々な動きが起こり、また生活を支える農家の主婦の意識もそれに対応して変化している。例えば、生活改善論の登場によって農家生活の「近代化」が目指され、他方で生活の中の潤いとして種々の大衆娯楽が浸透していったのもこの時期であった。

こうした諸研究が示しているのは、従来の文脈では、制度や理念・事物としての「近代」と相対的に最も遠い存在だと考えられてきた農村・農民が、そうした「近代」を彼らなりの形で受け入れ対応していたということである。これらの「近代」は、農村・農民の間に浸透しなかったのではなく、まして農村・農民が「近代」を排除していたわけではない。こうした「近代」を切望していたのは他ならぬ農民であり、それらと関係を保ちながら農民は自身の「近代」を生きていたのである。

しかしここで注意が必要なのは、農村・農民に「近代」の理念や事物が浸透していき受け入れられていくにつれて、逆説的にも農村・農民の主張の表面に「反近代」が強力に登場するということである。その「反近代」を典型的に表現していたのは「農本主義」であった。特に、当時の農村内部で「近代」を最も内面化していた「農村青年」世代は、「近代」や「都市」に憧れながら同時に、それに強烈な反感を抱いていた。このアンヴィヴァレンスこそ農村・農民にとっての「近代」経験そのもの、農民の生きた「近代」だといえるのではないだろうか。そして、それが「農本主義」に投影されることによって、昭和初期の農村・農民に、「反近代」という大枠の合意が形成されていくことになったと考えてよいのではないか。

本稿でその成果を用いた最近の諸研究では、農村・農民への「近代」理念や事物の浸透の様態が描かれているけれども、そこからさらに進んで、こうしたアンヴィヴァレンスにまでは論及されていない。例えば、大門の研究では「農本主義」に関しては殆ど取り扱われておらず、農村・農民にとっての「近代」は、表の一面だけしか描かれていないといってもいいだろう。あるいは板垣の研究においては、農村大衆の「近代」への志向は、単純

⁹⁾ 高橋 1960

に憧れや経済的現実路線とみなされており、「農本主義が農村大衆をとらえたとは考えられない」という立場をとっている⁶⁾。板垣の論考には、農村・農民にとっての「近代」の両義性という視角は全く含まれていず、どのように「近代」理念や事物が求められていたのかを描いたのみで立ち止まっている。これでは「反近代」や「反都会主義」を一元的に強調してきた従来の研究と異なるものではないだろう⁷⁾。けれども実際には、憧れの対象に容易に近づけないことが分かれば、それは簡単に憎悪に変わり得るのではないだろうか。つまり、理念や事物としての「近代」が農村・農民に浸透すればするほど、都市との生活の格差や「前近代」からの距離の違いを意識せざるを得ず、それを獲得したものに対する反感は大きくなっていくのである。そして現実には、経済の「近代化」、資本主義経済の発展によって、農民こそが最も不利益を被っていたのである。この意味で、農村・農民にとっての「近代」経験から一歩踏み込むことによって、「反近代」を象徴した「農本主義」との接合が重要なテーマとして浮かび上がってくるはずであるし、彼らの一見矛盾した志向・意識を総体として繋げて考える必要が出てくるのである。

簡潔にまとめれば、理念や事物としての「近代」が浸透していく様態を追求した先に農民が生きた「近代」を見ようとするならば、農民にとっての「近代」の両義性に注目する必要がある、ということである。そこにこそ、彼らの生きた「近代」が最もよく現れているといえるのではないだろうか。

第2章 農民運動と社会意識

ここでは特に大門の研究によりながら、「近代」の制度・事物が浸透していく下での農民（特に小作農）意識の変容を押さえつつ、それが「反近代」の象徴としての「農本主義」に繋がっていく過程を描きたい。

第一地大戦後の小作農民の意識の変化について、大門は次のようにまとめている。

第一次大戦をへて変化した小作農民の意識を、一言でいえば、それは、「小作人の能力上の自負心」とか「対等心」といえるものであった。小作農民に「自負心」が芽生えた要因として、小作労働と学校教育、軍隊経験、生活意識の四つをあげることができる。

前三者について、岐阜県では、「従来下等社会視せられし小作人は、労働価値の論議により小作労働の社会に貢献するの程度を認識」するようになり、「加ふるに逐年教育の発展に伴ひ

⁶⁾ 板垣 1992

⁷⁾ 例えば、高橋前掲論文のような、一元的な「反近代」「反都会主義」理解である。

小作人に向学の思想を増し」、「学校に於いて軍隊に於いて必ずしも人後に落ちさるの成績」を示した結果、「地主小作は能力に於いて匹敵するものなりとの自負心を生ぜり」といわれていた。⁽⁸⁾

小作農民の意識の変化に比べて、地主の意識・対応は容易に変わらなかった。そのため、小作農を「奴隷の如く」扱うような地主の「無自覚」や「我儘」「横暴」が批判的になっている。あるいは従来、人格や地位において地方の中核と認められてきた地主が、「奢侈」に流れた結果、「善良なる地方農家の風習を破壊」したともいわれていた。⁽⁹⁾ 小作農に人格的・身分的な服従を求める地主に対して、小作農は「自由平等」や「対等の地位」を求めるようになっていった。地主の「贅沢な生活」への反発とともに、それが小作料引き下げの要求につながっていき、後の小作争議など地主小作の対立の契機となったのである。

また、農村における生活水準の全般的な上昇は、小作農民の意識にも大きな影響を与えていたことにも注意が必要である。

「（小作人は）地主に対して従来主従の関係ありて相当の敬意を払ひたるも、今や全く地主の存在を認めず、地主が贅沢するは小作人が非常に苦勞して耕作し、其の産米を精選して給付するが為なり、吾等も人間たる以上、地主が贅沢する以上相当の生活をする必要あり、之が為には小作料を軽減するは当然なりと称せり……地主の小供が良き草履を着すれば小作の小供も同様なものを欲し、また地主の小供が袴を着すれば小作人の子も同様に之を要求し、小作の子のみ儉約せよとても出来ざるなり」⁽¹⁰⁾

このように、地主への対抗意識は小作農民の欲望の拡大からも起こった。また、小作が地主を「支えている」ということを認識することによって、小作農が「贅沢」をすることができるという正当性の根拠にもなった。

そして、農村の階層間格差の拡大や、労働市場の展開、農業経営と生活の商品経済化による経済的な環境の変化とともに、小作人の意識の変容は一九一〇年代後半から小作争議となって表れてくる。

この頃の小作争議は、まだ部落ごとの共同体的な関係をもとにして争われていた。それは旧来の共同体的な関係が弛緩・解体する過程において出てきたものであったからである。

⁽⁸⁾ 大門 1994 p.68。大門の引用は、農商務省事務官小平権一『岐阜県ニ於ケル小作紛争ニ関スル調査復命書』1921 からのものである。

⁽⁹⁾ 同上 p.70 岐阜県警察部『小作問題発達条件』1921 による

⁽¹⁰⁾ 農商務省事務官小平権一『岐阜県ニ於ケル小作紛争ニ関スル調査復命書』1921（大門 1994 p.68）

小作組合が設立されるが、未だ地主の力が強いため階級的な主張を行うことはできず、農事改良的な性格を持たざるをえなかった。それは一方で、地方改良運動や民力涵養運動などの国民統合政策と関わったものであった。大門のまとめによれば、

地方改良運動は、農事改良の担い手や青年層、軍人などをひろく「国民」形成の問題と結びつけたところに大きな特徴があり、地域における農会や青年団、在郷軍人会などの育成を課題としていた。従来よりもさらにひろい層を地域統合の担い手として設定したこの運動は、小作農民にも農事改良の必要性や国民意識を覚醒させる重要なきっかけになった。小作農民は小作組合の結成と農事改良の問題を結びつけ、その社会的必要性を訴えることではじめて小作組合を設立できたのである。⁽¹¹⁾

小作農民が小作組合の必要性を公然と主張するには、日常生活の場である部落に根拠をおくこと、および自らを「国民」として重要な社会的役割を果たすものだという根拠づけを行うことが必要であった。初期の小作争議の組織の中には、小作農の「国家社会」への貢献をうたうものもあったのである。小作農は、「階級」意識よりも「国家」に貢献するものであることを主張することによって社会的な支持を求めようとしたのである。

「一箇人の利益のために、多数人の生活を不幸ならしむるか如きことは進歩すべき国家社会に於いて断じて許さることなし、国民生活の権利は国家的貢献に正して比例せざるべからず」
(12)

一方、小作農を含めた一般農民の経済観念は商品経済化につれて大きく発展している。農村から都市への労働力の流出や、農民の生活世界の拡大＝都市との距離が縮まったことによって、以前はあまり意識されていなかった農業労働の賃金換算が、他との比較によって意識されるようになる。小作農は、小作収支計算書の作成などによってより客観的な方法・戦術によって主張を行い始めたのである。

そして、そうした経済的・実体的な部分とともに小作農の「人格承認」を要求する主張も出てくる。これは、地主との関係において人格的・身分的な従属を求められていた小作農が「一人前の人間」として認められること、「国民」として天皇の下での平等な立場を承認されることを求めたということであった。この時、一般に小作争議は「社会的公正」を求める運動であると認識され始めていたのである。ここで、政府による国民統合に促さ

⁽¹¹⁾ 大門 1994 p.88

⁽¹²⁾ 下越農民協会「宣言」（大門 1994 所収資料 p.114）

れて、国家・社会を支える「国民」としての小作農のアイデンティティー（それは社会的なものであって階級的なものではなかったことが重要である）が確立されたということになる。

大戦景気の反動による戦後恐慌の下で小作争議は急増していく。この時点でも、「人格承認」の要求は根強かった。小作料減免という単なる「経済的争議」が激化する理由は、地主が「小作人の人格を無視」し「人間として対等に扱わない」からだという主張がなされている⁽¹³⁾。小作農にとって、小作料の減免要求は「単なる経済的問題ではなく、自らの人格を解放し自己を農村社会の一員として認めさせる社会的平等要求と分かちがたく結びついていた」のであった⁽¹⁴⁾。このように農民運動を通じて小作農の意識の中心を占めたのは、「階級」ではなく「人格」あるいは「社会的地位」であった。

以上は大門の研究から導き出されたものであるが、ここでは、このような農民意識の変化が何を導き出したのか、さらに踏み込んで議論を展開していきたい。

<地主-小作>関係は、近代日本を最も典型的に表す社会関係だと考えられる。現在までの諸研究も、こと近代の農村・農民に関する限り<地主-小作>という一つの軸に集中してきた。しかし、「国家・社会」を認識し始め「国民」としての自覚を抱くようになった農民にとって、<地主-小作>の対抗軸以上に重要になってきた問題があったはずである。昭和恐慌期に起きた「農村の危機」、つまり農村の全般的な窮乏である。それは、<地主-小作>間だけでは決して解決することのできない問題であると認識されていた。その時「農本主義」運動が担ぎ出してきたのは、<国家-農民>というもう一つの軸であった⁽¹⁵⁾。そこで用いられた論理は、地主に対する批判を生み出した論理と同様である。「農は国の本」であり農民は国家を支えている、そして本分を勤めている農民が苦しまないようにするのが国家の責任である、という論理である。「近代」の経験により「国民」としての自覚を持った農民は、それゆえに「農は国の本」という名分を容易に、そして強固に支持したと考えてよいのではないか。ここで「農本主義」は、「<地主-小作>対抗の位

⁽¹³⁾ 農民運動史研究会編 1961 p.710。中部日本農民組合の1925年の臨時大会「宣言」

⁽¹⁴⁾ 大門 1994 p.111

⁽¹⁵⁾ 同様な見解は、例えば、長原豊が次のように述べている（長原 1989 p62）。「少なくとも、<地主-小作>関係のもとにある自小作農以下の耕作農民が、まずいわば小農として、自らの危機・矛盾を単なる<地主-小作>対抗のみに集中しえず、<地主-小作>対抗をも含めたより広い矛盾=資本主義の農業問題の解消にむけて自然発生的に運動へ結集していったゆえんは、村落内に内訌してもいかにともしがたい「全般的」窮乏の質に求められるべきであろう」。「農本主義」は、「<地主-小作>対抗の位相ではなく<国家-農民>対抗の位相」に、その争点を移行させる役割を果たしたのだと考えられるだろう。

相ではなく<国家-農民>対抗の位相」に⁽¹⁶⁾、その争点を移行させる役割を果たしたのだと考えられるだろう。「農本主義」は以後、農民運動の様々な部分に浸透していき、運動間の一つの合意になっていった。

「農本主義」が導いたこの論理の転換によって、小作争議が頻発し農民運動が隆盛した時期にもかかわらず農民の「国民」化が進行していき、戦時体制下の「皇国農村」「皇国農民」に繋がっていったと考えられるのではないだろうか。

このように、農民の意識に現れた「近代」は「国家社会への貢献」や「人格承認」など、それぞれが「近代」を生きていく中での翻意の結果であり、農民なりの「近代」解釈は彼らの不平・不満を醸成させた。それは近代という時代の農村において「農本主義」農民運動の一つの大きな原動力となったのである。

第3章 農村青年

第一次大戦から一九二〇年代にかけて農村から都市に労働力が流出するが、この時期の特徴はその中心が青少年層（男子）であったことである。これは、「都会熱」が問題になることでもあった。そして、この時期の青年層のもう一つの特徴は「教育熱」であった。高等小学校進学が農村に定着したのもこの頃であった。この時期に登場する「農村青年」は、日清・日露戦争期に生まれ大正デモクラシー期に青年期を迎えた世代であった。この世代は、「近代における学校教育体系と兵役が一生の節目にくみこまれた新しい世代」⁽¹⁷⁾である。この時期には、『キング』などの雑誌が、農村でも青年の愛読書となっている。そして、都会へ出た農村の青年の「苦学熱」「勉強熱」が注目されていた。「都会熱」がとりざたされるなかで、より以上の教育・文化を希求しながらも、そこから疎外され農村にととまらざるをえなかった青年にとって、「自己」の確立を目指す「修養」が重要な関心となっていく。

例えば、「農村青年」世代の小作貧農で後に農民自治会活動の中心になる渋谷定輔は、このように語っている。

「私は、中学へも大学へも行きたい夢を夜となく昼となく見たものだ。しかしそれは夢！
夢！ 夢以外の何者でもなかった。私は村のブルジョアの子供達の中等学校へ通う姿を見て、
如何に我家の貧しさを呪ったことか！ ……それなら自分は今の場所から本を読んで勉強して

⁽¹⁶⁾ 長原 1989 p.49

⁽¹⁷⁾ 大門 1994 p.164

いこう……」⁽¹⁸⁾

農民組合の青年部などが設立され、学習会や講演会などが積極的に催され、修養団活動も盛んになり、それらによって彼らの文化的欲求を満たすことが求められた⁽¹⁹⁾。「自我という新しい欲望」が農村の青年達にも浸透していったのである⁽²⁰⁾。後の昭和恐慌期当時（昭和七～八年）に農村を実地調査した猪俣津南雄は、「農村青年」に関して次のような感想を述べている。

「現在の農村青年は全く戦慄すべき心境の持ち主だ。これは私が今度の旅行で確認し得た極めて平凡で最も重要なことの一つだが、……彼等の最大関心事は『文化生活』にある。彼等は、もっと人間らしい生活をしたいといふ欲望で一杯だ」⁽²¹⁾

「農村青年」世代は当然、農村の文化・イエ意識などの因習を変革していこうという動きも生み出した。農村社会の自主的な変革、そして当時のキーワードとなった「自治」が、この時期の青年の関心の中心を占めていた。埼玉や長野の農民自治会運動は、学習熱の強い「農村青年」の世代によって担われていた。

このように「農村青年」世代は、戦前の農村社会において最も強く「近代」の理念・事物を希求し、そうした「近代」を内面化した世代であった。彼らが、昭和恐慌期の農村を支え、農村の中心になっていったのである（その後、この世代は戦後の農村を支えた中心的な存在ともなった）。そして、「農村青年」達の「近代」、彼らの生きた「近代」にはやはり、自らのアイデンティティーを保証するものとしての「国家・社会」が大きな影を落としていたのである。

「我々が常に社会だとか国家だとかいふ事を叫ぶ前に先自己の一身を確立する必要がある、自分は社会の一員であり国家の一員であると言ふ事を自覚すると共に、自分は何のために此の世の中に生きて居かと言ふ事を知る必要がある。」⁽²²⁾

⁽¹⁸⁾ 安田 1981 所収資料 p.20

⁽¹⁹⁾ 修養団は、一九〇六年（明治三十九年）、蓮沼門三によって設立された団体である。「流汗鍛練、同朋相愛」をスローガンに、「道徳的生活を実行して国家及び社会の向上発展を図る」と、「個人の修養を通して社会の改良を行うこと」を目指す精神運動である。（岡田 1985 p.80 を参考。）

⁽²⁰⁾ 橋川 1984 p.77

⁽²¹⁾ 猪俣 1982 p.152

⁽²²⁾ 東八千代郡青年団『団報』（大門 1994 所収資料 p.168）

また、「近代」の価値を内面化しながらも農村に止まらざるを得なかった「農村青年」世代は、それゆえにこそ自ら手の届かない「近代」の事物やモダニズムには強烈な反感を抱くことにもなった。彼らにとって都市は「近代」そのものであり、都市的な文化への憧れが強く存在するからこそ、都会への反感はいっそう強められていく。

「百姓の生活は、鯉節だ、都会人にいゝやうに削り採られていて、身も財も、細うなっていく……」⁽²³⁾

こうした「反都市・反都会」の感情は、昭和恐慌による農村の窮乏、および都市生活との格差が拡大することによってますます強められることになった。そして、「反都市」の「自治」を背景としての、郷土教育運動・農村文化運動・地方芸術運動などが盛んになったのである。

このように「農村青年」世代は、戦前の日本農村において最もよく「近代」を経験し、良い意味でも悪い意味でも「近代」という外部に刺激され、そこから逃れられなかった世代である。彼らの「近代」経験は、彼ら自身の様々な矛盾を創り出し、また、社会の矛盾に気づかせ、「近代」の理念や事物を受け入れながら「反近代」の主張に接近していく傾斜した心情を生み出すことにもなった。既に橋川文三は、「昭和の超国家主義」者にとって自我の内面的苦悶が如何に重要であったかを指摘しているが⁽²⁴⁾、運動の中心から距離のあった当時の多くの農民の意識の中にも併行して、橋川が指摘したような苦悶と屈折した心情があったことが分かるのではないだろうか。それは当時の農村・農民に広がり、「農本主義」によって<国家-農民>軸に接合していったと考えられるのではないだろうか。

こうした点を見てもれば、農民の「近代」的なものに対する態度は、板垣の言うような一面的な憧れだけであったはずはない。一方での憧れを見出したなら、他方でのアンヴィヴァレントな感情を見逃してはならないだろう。こうした両儀的な意味こそが、農民の生きた「近代」だったのである。

おわりに 農民意識なかの「近代」——逆説と重層——

このように戦前期に至る時期、「近代」の制度や理念・事物が相応の形で、様々な対応を呼び起こしながらも農村や農民の内部に取り込まれていったことが分かる。表面の顕著な連続性にもかかわらず、日本の農村・農民は外部からの「近代」を徐々に消化吸収して

⁽²³⁾ 『清明心』（岡田 1985 所収資料 p.166）

⁽²⁴⁾ 橋川 1994 参照。（初出 1964）

いったのであった。

そこには、決して「反近代」というネガティブな反応だけがあったわけではない。例えば、「反近代」の代表的イデオロギーとして一元的に捉えられてきた「農本主義」が、民間の農民運動の間で最も力を持ったのは昭和恐慌期であったけれども、詳細に見ていけばこの昭和恐慌期にこそ農村・農民に「近代」が浸透していったことが分かる。そしてまた、「反近代」を象徴する「農本主義」こそ、農民による「近代」的状況への対応だと捉えることもできるのである。

本稿で何度も強調してきたように、農民は反都市・反資本主義ではあったが、単純に「反近代」のみを主張したわけではない。「近代」という時代とその制度や理念、事物は、農民に経済的な上昇や文化的上昇など様々な欲望を抱かせた。その欲求を農民が実現するために用いたのは、「近代」的論理・理念であった。けれども、近代の資本主義経済の発展・産業の発展は農民を徹底的に追い込んでいく。それゆえ近代の農民は、外部としての「近代」に対してアンビヴァレントな感情、「敵でありながら憧憬せざるをえない」という矛盾に満ちた感情を抱かざるをえなかったのである⁽²⁵⁾。そこに、逆説的な状況が生まれたのであった。

このように農民にとっての「近代」の経験は、多様であり、様々な意味が重なり合ったものであった。そして、こうした逆説的状況こそが、農民が生きた「近代」であったのである。

参考文献

- 菅野正 1978 『近代日本における農民支配の史的構造』御茶の水書房
 ——— 1992 『農民支配の社会学』恒星社厚生閣
 菅野正・田原音和・細谷昂 1984 『東北農民の思想と行動』御茶の水書房
 大門正克 1994 『近代日本と農村社会』日本経済評論社 1994
 東敏雄 1987 『勤労農民的経営と国家主義運動』御茶ノ水書房
 安田常雄 1979 『日本ファシズムと民衆運動』れんが書房新社 1979
 ——— 1987 『暮らしの社会思想』勁草書房
 ——— 1981 『出会いの思想史＝渋谷定輔論』勁草書房
 高橋徹 1960 「都市化と機械文明」『近代日本思想史講座6』筑摩書房
 板垣邦子 1992 『昭和戦前戦中期の農村生活』三嶺書房
 農民運動史研究会編 1961 『日本農民運動史』東洋経済新報社
 長原豊 1989 『天皇制国家と農民 合意形成の組織論』日本経済評論社

⁽²⁵⁾ 松永 1970 p.263

- 岡田洋司 1985 『農村青年＝稲垣稔』不二出版
猪俣津南雄 1982 『調査報告 窮乏の農村』岩波文庫版
橋川文三 1984 『昭和維新試論』朝日新聞社
—— 1994 「昭和超国家主義の諸相」筒井清忠編『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版会（初出 1964 『現代日本思想体系31 超国家主義』筑摩書房）
松永伍一 1970 『土着の仮面劇』田畑書店

（のざき けんや・博士後期課程）

Peasant and 'Modernity': The Complexity of the Peasants' Consciousness in Japanese Rural Society before World War II

Kenya NOZAKI

The aim of this paper is to make clear the social consciousness of the peasants in Modern Japan in terms of historical sociology.

We tend to think that the peasants in Modern Japan were distant from modernity, modern things and modernization because we could see and feel the 'pre-modernity' of the peasants and the Japanese rural society, and even today we can see the continuity of their appearance from the pre-modern. In addition, we have always discussed about the 'pre-modernity' of peasants and rural society in Modern Japan. We haven't paid attention to how they received modern things or modernism, and how they lived under modernization.

So I think we have failed to recognize many things about peasants and rural society in Modern Japan. Their attitudes and responses toward modernity, modernism and modernization were complicated. There were not only rejection of these changes, but also acceptance or yearning. Anti-modernism and modernism were together as one in the peasant's consciousness. Peasants at this time thus possessed contradictory attitude toward modernism and modernization.

This kind of complexity can be seen in many situations, especially the discourse of "Nôson Seinen" (the young generation in rural areas). This was the most sensitive generation where modernity and modernism were concerned. To some extent they accepted modernity and modernism in their own way. However they became committed to anti-modernism because of the peasants' destitution under rapid modernization. So they did not simply reject modernity and modernism, but had ambivalent feelings about these things.

We need to verify again the real life and consciousness of the peasants in Modern Japan, then we can understand the reason for the popularity of the anti-modernism at that time.